

「21世紀型能力」を目指して

沖縄県立総合教育センター

教職研修総括兼班長 津波古 廣和

科学や情報技術の発展、グローバル化により教育環境が大きく変化する中、この数年「21世紀型能力」（現在の世界の経済的技術的発展の先端を見据え明確にそれを牽引しようとする知的な能力）や「コンピテンシー」（社会生活において人が本来持っている知識を実際に行動に移して活用していくことができる能力）について調査が進み、世界経済機構（OECD）でも同組織が実施するPISA調査では、基本の読解、数学、科学以外に「思考力」「協働」「協調的問題解決スキル」などが盛り込まれるようである。文部科学省が実施する全国学力状況調査に基礎知識を問うA問題に加え、基礎知識を活用して、思考力・判断力・表現力等を問うB問題が導入されているのも、学習指導要領が求める「21世紀型能力」に対応するためである。本年度、全国学力状況調査において沖縄県は小学校部門全教科総合最下位から24位へ改善した。小学校算数Aでは6位と目覚ましい結果を残し、県民が喜ぶところであった。ただし、B問題（基礎基本知識を生かし応用して課題を解決する問題）については沖縄のみならず全国的に課題が指摘されている。

主体的に考える力を持ち、生涯にわたって学び続ける力を子どもたちにつけさせるため学校は従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から脱却する必要がある。教師と幼児児童生徒が互いに意思疎通を図りつつ、授業を知的に成長する場とし、子どもたちが自ら問題を発見して解を見いだしていくアクティブ・ラーニング（能動的学習）への転換が求められている。本教育センターの平成26年度の調査研究報告や長

期研修員が行った成果報告の多くは子どもたちの「思考力・判断力・表現力」をいかに伸ばすかに主眼が置かれている。子どもたちの「学びの場」としての授業実践を行うために、本教育センターでも授業づくりに協調学習である「知識構成型ジグソー法」「反転学習」等やICTを活用したアクティブ・ラーニング（能動的学習）の授業方法の実践研究が始まっている。

授業において、子どもたちの能動的学習を実現するためには、これまでとは違った視点で授業の準備をする必要がある。各校種、教科・科目の年間計画からシラバス、指導案作成等大いに工夫が必要となってくる。各単元計画の中でアクティブラーニングに何を取り入れるのか。ペア学習、グループ学習、ディスカッション、ディベート等、1時間の授業のねらいに応じて協調学習の在り方を考慮しながら、教材研究にこれまで以上に時間をかけていきたい。協調学習の実践事例は多く公開されているので、国立教育政策研究所や各都道府県教育センターのウェブページ等で閲覧できるので参考にしてもらいたい。

中央教育審議会によれば2020年にはセンター試験が廃止され、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」導入の予定である。この評価テストでは暗記した知識の量ではなく、思考や判断など知識の活用力が問われる。試験実施には様々な課題があり正式な実施となるか分からないが、いずれにしてもこの流れは変わらないであろう。「21世紀型能力」を目指して日々の授業実践を進めていきたい。

*****もくじ*****

●巻頭言「21世紀型能力」を目指して	－ 1 －
●平成26年度「移動教育センター講座」 ●カンボジアの教育の現状	～教科研修班～ － 2 －
●適応指導教室通級児童生徒体験活動交流会 ●子どもの心を理解する保護者交流会	～教育経営研修班～ － 3 －
●地域へ出向く「おもしろ科学教室」 ●平成27年度「自主講座」案内	～理科研修班～ － 4 －
●ココがポイント「読み書き障害への対応」 ●高等学校における特別支援教育の現状	～特別支援教育班～ － 5 －
●「タブレット端末活用講座」大盛況！ ●インターネットを賢く利用するための心得	～IT教育班～ － 6 －
●生徒実習（測量実習）自動追尾型トータルステーション ●新機器導入 ウォータージェット加工機	～産業教育班～ － 7 －
●研修成果報告会 ●研修を振り返って ●平成27年度県立総合教育センター事業等説明会（ご案内）	－ 8 －

平成26年度「移動教育センター講座」 —宮古・八重山地区における教員研修の支援・充実を目指して—

宮古・八重山地区における教職員の資質及び指導力の充実・向上や組織としての学校力の向上に資するため、教員研修の支援・充実を図ることを目的として、各地区9講座、合計18講座を開設しました。校内研修や個人研修として活用され、宮古地区で160名、八重山地区で122名の先生方の参加がありました。

学習指導要領や全国学力学習状況調査に関した講義を中心に、公開授業や実践事例報告、教材教具の工夫と演習、ブレインライティングの手法を用いた研修を行いました。

参加者からは、「即実践可能な内容で非常に有



講座の様子(ノートづくり)

意義な講座だった。すぐに実践してみたい。」「実践報告の発表は、授業のヒントがいっぱいあってとても助かった。」「今日の内容を活用し、ベクトルを合わせて校内研究を進めていきたい。」などの感想があり授業実践のスキルアップにつながる機会となりました。

実施した講座

月	日	地区	講座名
5	15	宮古	特別支援教育
	16	八重山	
5	22	宮古	授業づくり
	23	八重山	
6	5	宮古	ノートづくり
	6	八重山	
6	12	宮古	小規模複式学級担任講座・公開授業
	13	八重山	
6	26	宮古	家庭学習の定着
	27	八重山	
7	3	宮古	教育評価概論
	4	八重山	
7	30	宮古	小中道徳講座 小中特別活動講座
		八重山	
8	20	宮古	小学校国語
	19	八重山	
8	26	宮古	小学校算数
	25	八重山	

カンボジアの教育の現状

平成26年度JICA地球ひろば教師海外研修教育行政担当コースに参加して

カンボジアはボル・ポトによる知識層の徹底した虐殺があり、その結果、国民の平均年齢が約24歳となっています。その影響で、教育施設で子どもたちを教える教師が不足したり、指導スキルに遅れをとったりしているのが現状です。

カンボジアの教育制度は、日本と同じで、6・3・3制を採用し、小・中までは義務教育となっており、カンボジアの教育庁は国の学力向上や教師力向上に政策を頑張っているところです。しかし、保護者の経済的な問題や教育の必要性の認識不足などが原因で、学年が上がるにつれ進級率が下がってきます。

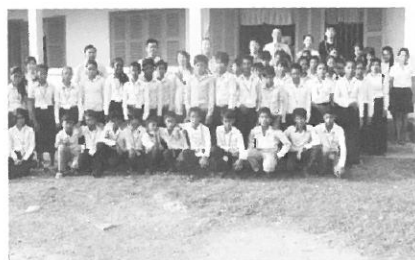
JICAから派遣されているボランティアの方々が教授法、学校行事の意義や運営の仕方、備品の活用の仕方など多方面から支援を行い、体育の授業では日本のラジオ体操をしている風景



ラジオ体操風景

もありました。

カンボジアは日本の企業も多く参入しており、相互依存の観点からカンボジアから恩恵を受けている部分もあります。日本語を学ぶ学生も増加し、プノンペン大学の学生は、日本は人権が守られているので日本企業で働きたいと理由を語ってくれました。



現地の中学生

今回の研修で、現地の人々の生活に触れ、子どもたちの勉学に対するけなげな姿が印象に残りました。上の写真は地方の中学生です。研修の目的のひとつである「国際協力の現状などを深めることにより初等中等教育の一層の充実」に向け、研修で得た知識や体験を活かし長期研修員へ助言をしたり、短期研修や出前講座などで触れたりし、この研修で学んだことを直接的にも間接的にも学校現場に還元できるように計画し実施していきます。

教育経営研修班

適応指導教室通級児童生徒体験活動交流会 ものづくりやおもしろ科学教室を通した、児童生徒の交流

本総合教育センターでは、適応指導教室通級児童生徒等への支援の充実を図るため、県内12カ所の適応指導教室の児童生徒や各学校の教育相談室等に通級する児童生徒を対象に体験活動交流会を開催しております。

本事業は①本センターの諸施設を見学・体験することにより、社会への理解と関心を高めること、②「おもしろ科学教室」に参加することにより、自然科学への興味・関心を高めること、③各教室に通う児童生徒が一堂に会し、他者との交流の中で、様々な活動を体験させることにより児童生徒間の連帯感を育み、学校復帰への一助とすることを目的としています。

今年度は、12月5日(金)に実施し、児童生徒53名の参加がありました。午前中は、「プロジェクト・アドベンチャー」等の全体交流を行った後、各会場(各研修棟)に移動し「オリジナルTシャツづくり」等の8つのプログラムの中から、1つを選んで参加しま

した。午後のおもしろ科学教室では「備長炭で電池をつくろう」等の5つのコーナーを体験しました。

ペン立てづくりに参加した女生徒は、『木材をやすりで磨いたり、ネジをとめたり、機械を使って板に穴を開けたり、自分の好



みにデザインして作れたところが楽しかった。ドリルは初めて使ったので良い経験になったし、DIYに興味を湧いた』と感想を述べていました。

本事業を通して、各教室に通う児童生徒が他の教室の児童生徒と交流し、いろいろな体験をすることで、自分の世界を広げることができたのではないのでしょうか。

子どもの心を理解する保護者交流会

6月・10月・2月の日曜日に、不登校児童生徒の保護者を対象とした「子どもの心を理解する保護者交流会」を行いました。参加者はのべ105名で、そのうち保護者は67名、教員や指導員等の教育関係者が38名でした。講師に、琉球大学教育学部の平田幹夫教授をお招きして、保護者の悩みへの助言をいただきました。

会の持ち方は、平田先生のアイスブレイクに始まり、グループに分かれての保護者交流会、最後に全体会でそれぞれのグループから出た質問に平田先生が答えるというスタイルでした。助言の中で、「自然からエネルギーがもらえる。子どもに自然との触れ合いを持たせよう」「親が、やるべきことを決めつけるのではなく、選択肢を与えるだけにとどめ、本人に選択させよう」「本人に家庭で役割を与え、やってくれたらありがとうと意識的に言ってあげよう」というような言葉がありました。

また、参加した保護者からは以下のような声がありました。

- 子どもの良い所をほめてゆっくりその子のペースに合わせていきたい。
- 子どもが生まれたときのあの感動を思い出した。何事にも感謝する大切さに気付いた。
- 自分だけがダメな親ではないかと落ち込んでいたところ、交流会に参加してみなさん同じ悩みを持っていると知り、勇気づけられた。
- 他の保護者のケースや関わり方などを聞いて、悩みが少し解決した。

校種を超え参加者同士が悩みを共有したことで、来た時よりも明るい顔で帰られる保護者や教育関係者の方々が印象的でした。

次年度の開催は、6月・9月・12月・2月の4回です。



地域へ出向く「平成26年度おもしろ科学教室」 石垣市、恩納村、宜野湾市の子どもたちに実感を伴った理解を図りました

「おもしろ科学教室」は、身の回りの自然現象について、観察・実験、ものづくりを通して実感を伴った理解を図り、科学に対する興味・関心を高めることを目的としています。

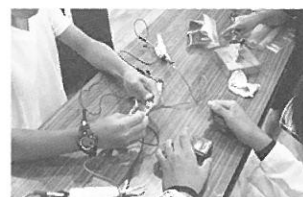
今年度は石垣市、恩納村、宜野湾市の3地域へ出向き科学教室を実施しました。特に石垣市では科学教室の他に野外実習も行い、生物分野では野外観察シート（植物図鑑と昆虫シート）を使った蝶の観察、地学分野では大浜の崎原公園での津波石の観察を行いました。子どもたちと保護者の観察の様子や感想から、体験を通して初めて知った驚きと、郷土の自然環境への興味・関心の高まりがみられ、科学に対してもっと調べてみたいという意欲につながっていることが分かりました。

参加した児童の主な感想

- 蝶の足が4本だと思ったら6本だった。今後は、はちゅう類の生態系を調べてみたい。
- 炭が電池になるなんて、初めて知ってびっくりした。今後いろいろ物資やその使い道を知りたい。
- 津波石が2000年前に流されてきたという説にびっくりした。もっと詳しく調べていきたいです。



生物領域：蝶の観察



化学領域：化学電池づくり



地学領域：大浜の津波大石（つなみうふいし）の観察

おもしろ科学教室in石垣	
領域	内容
物理	モーターでLEDをつけよう！
化学	化学電池をつくろう
生物	野外観察（生物：バナナ岳、）
地学	（地層・地形：津波石）
技術	ウッドマグネットを作ろう

平成27年度自主講座の案内

教師の指導力向上を目指して実践的な教材・教具を紹介しています

昨年度の自主講座には、小学校理科のべ152名、技術・家庭科のべ40名の先生方が参加されました。参加した先生方のアンケートから教材・教具の紹介や授業づくりなどの実践を通し、新たな発見と学習指導への意欲の高まりが見られました。理科研修班では今年度も引き続き、授業づくりへの支援に向け自主講座を充実させていきます。多くの先生方のご参加をお待ちしています。

【技術・家庭科】

回	月	日	研究室	内容（予定）
1	5	22	家庭科	小学校家庭分野「被服」
2	6	5	家庭科	小学校家庭分野「調理」
3		12	家庭科	中学校家庭分野「被服」
1	11	10	技術	A材料と加工に関する技術

【小学校理科】

回	月	日	領域	内容（予定）
1	4	24	生物	生命の連続性
2	5	8	生物	生物の構造と機能①
3	6	5	生物	生物の構造と機能②
4		12	生物	生物と環境とのかかわり
5	7	3	地学	地球の表面
6	9	4	地学	地球の内部
7	10	9	化学	粒子の存在
8		30	物理	エネルギーの見方
9	11	6	化学	粒子の保存性 粒子のもつエネルギー
10		27	物理	エネルギーの変換と保存

※詳細は本センターHPに掲載しています。
<http://www.edu-c.open.ed.jp/>

ココがポイント「読み書き障害への対応」

日本語は、ひらがなと漢字が混在して用いられます。そのため、音韻に対する気づきや音韻の認知（音韻意識）だけでなく、文字の形の認知処理や空間構合力、さらには協調運動などに不全がある場合に、読み書き障害が生じるとわれています。

読み書き障害への対応については、①通常の学級の大部分の子どもに有効な指導を行い、困難さが出てくる前の段階でつまづきを予防②伸びを評価し、援助介入のための手立てを多数用意する等の集団と個別の両側面からのアプローチが必要だといわれています。困難さがあることに気づかれにくい読み書き障害だからこそ、困り感が出てくる前の予防の視点が大切なのだということです。

ところで、皆さんは多層指導モデル「MIM」(以下「MIM」とする)をご存じですか?日本語の初期の読み書き指導において、まず特殊音節の読み書きが最初につまづく所だといわれています。「MIM」は、その特殊音節に焦点を当て、文字や語句を正しく、なめらかに読み書きすることができることを目指す指導モデルです。まずプリントを用いて児童生徒が特殊音節についてどの程度できていてどこでつまづいているのかを学級集団・個別で把握し、指導教材、指導計画作成から評価まで行えるチェックリストや活用ソフト等が1つのパッケージに納められ、教員がすぐに活用できるようになっています。

「MIM」では「正しい表記の語を素早く認識する力」「語を視覚的なまとまりとして素早く認識する力」について評価を行い、支援を要する子どもを明確にし、今後の指導内容の選定や学級全体としての習熟度も確認することができ集団での指導と個別での支援を進めることができます。また支援後、再度確認することで指導の評価につながります。

授業での効果的な指導として、目に見えない音の特徴を体を使って具体化して捉えられるよう動作化することや音のイメージや音の混成・分解を視覚的に捉えられるように工夫された教材が紹介されています。

学習する課題は、ひらがな、漢字の読み書きから、文章の読解へと変化し、それに応じて支援も変わってきます。今後、センターにおいても予防に視点をあて、読み書き障害のある子ども達の学びを保障できる指導についての支援を進めたいと考えています。

高等学校における特別支援教育の現状 ～今後の取組への鍵～

今年度、共同研究において、県立高等学校で特別支援教育支援員（支援員）の配置が行われている学校と特別支援学校中学部から進学した生徒が在籍している学校 20 校へ調査を実施し、現状と課題をまとめました。対象校は、普通科、専門学科、総合学科、単位制、学力面でも幅があり様々なタイプの学校でした。在籍している生徒の障害種は、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱、発達障害等でした。その中で視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱等の障害の支援については、支援内容や方法が支援する側もされる側も理解しやすい状況で支援員が配置されている学校では休み時間等に身体のケアや体調管理等確認が行われていました。

その一方で生徒自身が特別扱いして欲しくないという希望も強く、病気の進行や身体の状態の維持等必要な支援を断ることがあることも把握されました。また、調査を行ったほとんど全ての学校において「発達障害等の生徒の支援は課題である」という回答があり、生徒自身の障害受容や学習の支援についての支援方法の理解について不安を感じていることがわかりました。高校生の時期はどの障害にも共通することですが、障害受容が難しい時期に必要な支援を断ることがよくあり、支援にあたるものは、この時期を理解し、丁寧に生徒とのやりとりを重ね支援を進めていく必要があると考えます。また、発達障害についてどのような支援が行われているか事例を紹介します。

課題提出や追試などを忘れてしまう生徒に支援員と一緒に確認を行ったり、パソコン入力ができるようになるためにローマ字学習の学び直しを行ったりする等です。個に応じた支援が行われ、生徒が自分にもできるという自信を回復し、単位修得や進級することができたという回答もありました。逆に小中迄に支援が行われている生徒は、自らの障害受容もできており、中学校から支援方法が適切に引き継がれ、学校、生徒共に課題として感じていないケースもありました。これは、早期からの適切な支援は生徒にとっても支援する側にとっても望ましいと考えます。

今、高校は生徒の困り感に気づき、支援を進めています。今後高校は、高校間の支援事例の共有、中学校との連携つまり「繋がること」がより重要で鍵を握ると考えます。センターも「繋がること」を意識して様々な情報を提供していきたいと考えています。

「タブレット端末活用講座」大盛況!

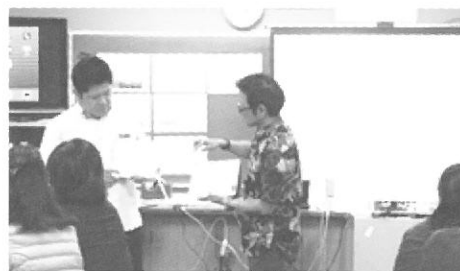
文部科学省が提唱している「教育の情報化ビジョン」の中で、ICT機器を活用した授業展開や情報通信技術の活用として、デジタル教科書の活用や児童・生徒一人一台の情報端末による学習があげられている。特に近年、本県においても「タブレット端末」の具体的な活用方法を紹介して欲しいという現場の声があり、今年度は、嘉手納小学校、伊豆味小中学校、大原小中学校、北大東小中学校、糸満高校、南部農林高校、高等特別支援学校など、離島北部を始め様々な地域と校種へ「タブレット端末活用講座」を行った。

講座では、電子黒板と組み合わせた提示用教材としての活用方法やアプリを活用した授業実践、すぐに授業で役立つ教育アプリ等を紹介している。漢字ドリルや算数の計算などのアプリは誰でも簡単に楽しみながらできること、静止画や動画を編集するアプリは、すぐに教材が作成できることなどを紹介している。

また、児童・生徒がタブレット端末を協働学習

のツールとして活用することについては、グループ同士で意見を言い合ったり、協働でプレゼン資料を作ったり、発表したりするなど多岐にわたることから「タブレット端末を導入したが、どのように活用していいかわからない」という現場の教師も少なくない。

タブレット端末活用の鍵を握るのは、このような研修を通した授業力の向上であり、今後も積極的に活用方法や実践事例の紹介を行っていききたい。またタブレット端末の可能性を最大限に引き出すには、インターネットに接続する環境が必要であるため、無線LANの構築も必要となってくる。人材育成とインフラ整備のソフトとハード面からの支援が今後の課題である。



ータブレット端末活用講座の様子ー

インターネットを賢く利用するための心得

Windows95が発売された1995年、この年から急速にインターネットが普及し、現在に至っている。ちょうど今から20年前の出来事である。インターネットの発展は我々の生活を豊かにしたが、同時にこの20年インターネットを利用したトラブルも数多く起こった。トラブルを起こさないためにも「情報」と「インターネットの特性」に対する理解を深めることが大切である。

辞書で「情報」の意味を調べると、ニュアンスの異なる2つの意味が掲載されている。それは情報の「送り手」としての意味合いと情報の「受け手」としてのそれである。ニュアンスが異なることは情報の「送り手」と「受け手」では情報のとらえ方に差があると言うことである。情報を送る場合、情報を受ける側のことを考えて情報を送っているであろうか？また情報を受け取るとき、送り手側の伝えたい真意を汲み取って情報を読み解いているだろうか？相手方のことを気にしながら情報のやり取りを行うだけでも、トラブルを回避することができる。すなわち「情報のやり取り＝コミュニケーション」は相手のこと思いやる気持ちが大切になる。相手

がどう考えるのか、相手は何が言いたいのか、面前でのやり取りでは当たり前のことであり、インターネットでも同じである。

インターネットでのコミュニケーションは文字を介して行われることがほとんどである。文字によるコミュニケーションの場合、伝えたい真意の30%程度しか伝わらないという研究結果がある。この結果に照らし合わせて考えると、日常的に行われる文字によるコミュニケーションでは、真意は伝わりにくいということである。実際にメールやSNS等でのコミュニケーションの場合、真意が伝わりにくい特性を踏まえた利用を心がけることが大切である。

またインターネットの特性として、情報は全世界中に公開され、個人情報漏えいしやすく、公開された情報は決して削除されることがない。また、SNSやデジタルコンテンツに依存しやすく、デマ等により不安を覚え、自分の意にそぐわない意見には感情的になりやすい。

インターネットを使う際には、そのような特徴を知りながら、賢く利用し、生活を豊かにするためのツールであることを心得て使用したいものである。

生徒実習(測量実習)自動追尾型トータルステーション

産業教育班では、産業教育に係る生徒実習を実施しております。今年度も多くの専門高校生が産業教育班の施設・設備を活用した実習に参加しました。



名護商工高等学校



美里工業高等学校

写真は、名護商工高等学校電建システム科建築技術コースと美里工業高等学校建築科の生徒による測量実習の様子です。

三次元測量装置一式(平成25年度導入)

①三次元レーザースキャナ

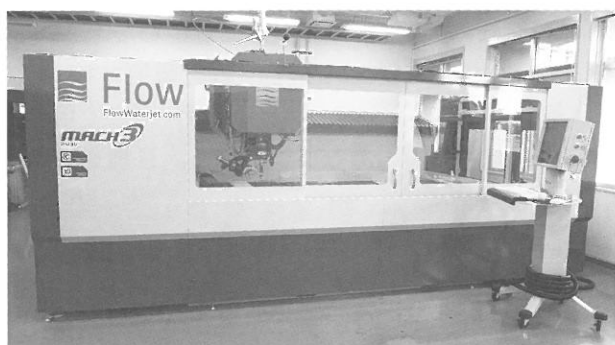
最近の測量方法である三次元レーザースキャナによる地形測量を行う装置で、これまでの平面的な測量業務にはない三次元での測量を行うことで道路の起伏や路面形状の計測や、土木工事等での土量の算出・表面積の算出、建築物や災害調査などの三次元での状況計測が可能となり、より先進的かつ精度の高い測量技術を学習することができる。

②自動追尾型トータルステーション

トータルステーションは土木・建築現場でもっともよく利用されている測量機器で距離と角度を測定することができる。今回、導入された自動追尾型は自動追尾エンジン、デジタルカメラを搭載したワンマン型トータルステーションであり、測量業務の効率化を図り、一人での測量が可能な最先端機器である。

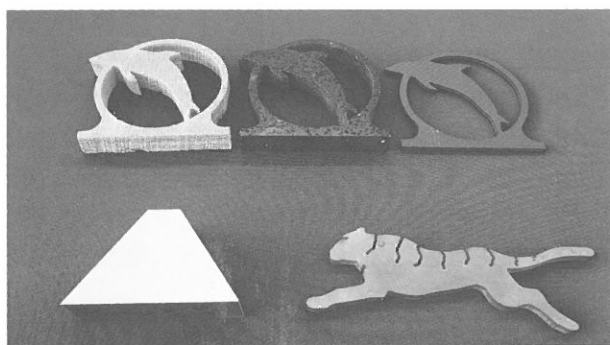
三次元測量装置一式を導入したことにより、最先端の測量技術を学習することができ、土木、建築分野における測量に関する知識や技術を習得し、将来のスペシャリストの育成が図られると考えます。

新機器導入 ウォータージェット加工機



ウォータージェット加工機 (2500mm×1300mm)

総合生産システム研究室に2月から新しい装置、ウォータージェット加工機が導入されました。早速、2月12日・13日の日程で工業高校の職員を対象に講習会を開き、13名の先生方がこの機械を体験されました。参加した先生方からは「これまで加工できなかった銅や40mmの厚さのアルミが簡単に切れるのは凄い!」



左上から 木材・人工大理石・CFRP・アルミ・銅

「これまでのレーザー加工機では切断できなかったCFRPが切断できるので生徒のものづくりに活用したい」といった感想がありました。

県内には導入例のない機械で今後、生徒実習やものづくり、職員研修等で多くの活用が期待されています。

平成26年度後期・1年長期研修成果報告会

平成26年度後期・長期研修成果報告会が3月3日(火)～6日(金)の4日間の日程で、本センターで開催されました。研修の意義を再確認するとともに研究の内容を共有し、今後の教育実践に役立てることを目的とし、後期・1年長期研修員55名が各自のテーマに基づき、教育課題解決のための意欲的で熱意の伝わる報告を行いました。

また、又吉孝一センター友の会会長を始め、関係学校長や教諭等多くの方々の参加がありました。関係各位のみなさまの激励を受け、研修員一同は、6ヶ月・1年の研修成果を十分に報告できたものと思います。



研修を終えて...



教育経営研修班
糸満市立西崎中学校
教諭 宮城 義隆

研修員の健康管理を気遣う研究主事の暖かい言葉を頂きつつ、研修がスタートしました。私は、日々の教育活動において、その重要性や難しさを感じていた「生徒指導」と、個人的に学んでいた「コーチング」をつなげることを目的に、本研究を進めてきました。担当主事は私自身の追求したい研究の方向性に寄り添いつつ適切な助言をして下さり、そのお陰で方向性を見失わずゴールまでたどり着くことができました。また、担当主事以外からも励ましやご指導を頂きました。

もう一つの大きな財産は、苦楽を共にした長期研修員との出会いです。校種やテーマが違う中、率直に意見交換をすることも多く、研究の深まりにつながりました。特に、他校種の検証授業の見学などは、学校現場にいる中ではなかなかできない、貴重な体験となりました。今後も互いに交流を持てたらと考えています。

最後に、私たち長期研修員にとって最も大切なことは、この研修を通して学んだことを学校の幼児児童生徒及び職員に還元し、ともに教育活動に取り組んでいくことです。

所長をはじめ多くの主事の皆様、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。



教科研修班
八重瀬町立東風平中学校
教諭 仲宗根 亜矢

「ダイヤモンドはダイヤモンドでしか磨けない。」島田主任からの熱い激励を受け、私たちの研修は始まりました。小・中・高15名の研修員で構成された教科研修班。一人一人の知見や人柄が私を大きく成長させてくれました。各ステージで沖縄の子どもたちのために熱く奮闘している仲間の志に触れ、私自身、教師としての責任感を強めることができました。山田所長をはじめ、大瀨班長、島田主任、そして担当主事の皆様のご指導や激励に感謝し、教育現場において精一杯の力を発揮してまいります。また、日々の学校現場での取り組みを充実させていくため、より一層の自己研鑽に励んでまいります。今後も初心を忘れず、自己の信念をしっかりと持ち、教材研究においては貪欲に追究し、授業、学級経営等、ここで培った広がりや深まりのある視野に立ち、目標を高く、柔軟に対応できるよう、教育者の一人としてあり続ける所存です。



平成27年度 県立総合教育センター事業等説明会(御案内)

本センターが実施する学校支援、教師支援に関する事業等を周知し、理解を深めるとともに、各教育機関や学校現場との情報交換を行うことで、本センターの充実と発展に資することを目的に実施いたします。

日 時：平成27年4月20日(月) 場 所：県立総合教育センター 多目的研修棟